

第2部 映画上映＋トークショー 「被災地の祭から見てくる心の復興」

手塚 眞 (ヴィジュアルリスト、有限会社ネオンテトラ代表取締役)

(映画『雄勝～法印神楽の復興』上映後)

【手塚】

皆さん、こんにちは、手塚眞です。本日は映画『雄勝～法印神楽の復興』を御覧いただきまして、本当にありがとうございます。

作品が全てを語っておりますので、余り補足することもないのですが、この映画が作られました事情と、そしてこの映画の意図につきまして、お話させていただきたいと思います。昨年（2013（平成25）年）の8月、宮城県石巻市でも人権シンポジウムを開催されたそうですね。この映画の舞台は、正にその石巻なのですが、そもそも石巻と私は特別に何か縁やつながりがあるわけではございません。まず、この映画を作るきっかけとなったのは、4年前、震災より1年前に、東京の国立劇場で行われた雄勝法印神楽の公演です。東京で上演されるのは初めてで、当然私も初めてそこで見させていただきました。お分かりのとおり、神楽と申しますのは、元々、祭りの中でこそ意味があるもので、舞台芸術ではございません。ですから、国立劇場で上演されるというのは、非常に特別な機会だと思います。また、劇場で上演することから、本来の神楽の形とは少し変わってしまうのですが、ただそこで、初めてこの神楽を拝見しまして、私は大変驚きました。その様式にしても、描かれた内容にいたしましても、他の神楽と比較できないような、非常にユニークなものだと感じたのです。もしかしたら、皆様も神楽を御覧になったことがあるかと思いますが、大抵祭りの中の神楽は、意図はあるにしても、少し見ていて退屈してしまうような、だらだらとしたものが多いです。しかし雄勝法印神楽は、御覧になったとおり、非常に娯楽性が豊かで、歌舞伎の舞台を見るような、そのぐらい楽しませてもらえる部分がありつつ、なおかつ、神楽本来の形を非常にきちんと残しているのです。

神楽は、元々は山伏が伝えたと言われておりますが、明治時代に神仏分離令（神仏判然令）が引かれまして、これによって全国の神楽がその元の形を崩されてしまったと言われております。ほとんどの神楽は、その時に、原型を変えてしまい、中には滅んでしまった神楽もあります。ところが、雄勝法印神楽は比較的原型をとどめております。そういう意味でも、歴史的にも、貴重な神楽だと思っております。この神楽を見た後、ブログに「今日、非常に面白い神楽を見た」と書きました。すると、この神楽の保存会の方からコメントをいただきまして、次はぜひとも地元で見て下さいと、お祭りの誘いを受けたのです。行こうと思っていたのですが、あいにくその年は時間が合わず、祭りに行けませんでした。では翌年に行けばいい、毎年やっているのだからと思っていましたら、翌年に東日本大震災が起きてしまったのです。

先ほど、映画を御覧になったとおり、雄勝は甚大な被害を受け壊滅しました。もうお祭りどころではない。もう神楽を見ることはできないのかなと非常に残念な思いでした。しかしその後、全国のいろいろな方々から、この神楽を支援しようという動きがありまして、私も多少協力しました。すると、東北の文化芸能を支援してありました日本ユネスコ協会連盟様から、雄勝の祭りが地元で復興するので、それを是非とも映画に撮ってくださいと依頼を受けました。私は、前々から気になっていた神楽でもありましたので、映画を作るということになりました。



手塚眞さん

ただ、お話を受けた当初は、非常にためらいまして、また不安もございました。震災から1年経ったとは言え、震災直後の状況をまだまだとどめている地域に、記録とはいえ他人がカメラを持って入って、地元の方々を撮ることは、なかなか勇気がいることとございます。特に、祭りというのは、その地域地域の方々が本当に大事にされている習慣です。地元の人ではない私からすると、貴重なものだという認識だったのですが、地元の人たちにとってみると、貴重というよりは、祭りは町のために大事なものです。そこに他人がカメラを持って入っていいのかと懸念いたしました。

すると、日本ユネスコ協会連盟様から、その祭りの復興を記録したこの映画は、今後いろいろな地域で上映し、被災地以外の人たちには、雄勝で実際に起きていることを見ていただける機会になり、また同じように被災した方々には、励みや勇気、また何か考えを得られるきっかけになるのではないかとおっしゃってくださいました。もちろんそれは非常に意味のあることでありますし、東北全体に何か励みになるような、そのようなお手伝いができるのであればと思います、これをお引き受けいたしました。

ただ、引き受けた後も、少し不安が残っておりました。それは、こちらがそのような意義を感じていても、地元の皆さんが私たち映画を作る人間を受け入れてくれるかどうかという問題です。特に、祭りという非常に限られた場所、空間と時間、そこにお邪魔するわけです。さらに、震災後初めての祭りで、雄勝の人たちにとって重要な時期でもありましたので、とにかく邪魔をしてはいけない気持ちで、悩みました。ですが、もうこれは引き受けたので、やるしかないだろうと思い、撮影の前に、何度か雄勝を訪れました。私は初めて雄勝を訪ねた時、非常に美しい景色のあるところだなと思いました。被災地に行って美しいなんて言うのは失礼なのかもしれませんが、とてもすばらしいところで撮影をさせていただけるのかと思いました。

私は、ずっと映画の仕事をしておりますので、地方で撮影をすることは結構多くあるのですが、地方に撮影でお邪魔した時に、最初に必ずやることがあります。それは、その土地の中心に御挨拶をすることです。中心というのは、県庁や市役所ではございません。その土地そのものの中心になるようなところを探すわけとございますが、これが便利にできておりまして、大体神社なのです。どこの土地にも、その土地を守っている神社がございます。その土地にとって大事な神社です。土地によってはいくつもあつたりしますが、その神社に必ず御参拝することにしております。

ですから、雄勝に初めて行った際、まず訪れたところは神社でした。雄勝に神社はいくつもあるのですが、今回、特にお邪魔する地域の主要な神社をまず巡りまして、どうぞここで撮影をさせていただきます、と神様にお願いをするわけです。もちろん、被災地の神社ですから、全部崩れてしまって、無いようなところもあるのですが、そのようなところを全て巡りました。それが済みますと、次は実際にお世話になる町の方々と交流です。この神楽を舞っていらっしゃる保存会の皆さん方に集まっていたら、御挨拶をする機会をいただきました。

神楽は御覧いただいたとおり、神社に保存会がございます。半分倒壊している神社だったのですが、社務所も倒壊しており、プレハブが建っておりました。そのプレハブは6畳ぐらいの本当に狭い空間なのですが、そこに保存会の皆さんに集まっていたら、私たち映画制作のスタッフと面会して御挨拶させていただきました。お邪魔になるかもしれませんが、今回は本当によろしく申し上げます、という話をしました。

私はその時はまだ非常に緊張しておりました。被災地にカメラを持って入ることに関して、まだ疑念が払えない状態だったのです。ですが、この時、すごいことが起きました。御挨拶している途中で、神楽師の皆さんが、一斉に窓の外をハッと御覧になりました。皆さん、あっと言って驚かれています。私は、何があったのだろうと、窓の外を見たところ、なんとそこに人間ではないものがいたのです。大きくて白くて毛むくじゃらで角が生えたものがいたのです。本当にびっくりしました。

ニホンカモシカだったのです。雄勝という地域は、歴史書によると、昔は野生のシカがたくさんいたようです。しかし、ニホンカモシカが生息しているという記述はどこにもございませんし、またその地域にたくさんいることもないそうです。どちらかの山から流れてきたのかもしれませんが、雄勝

でニホンカモシカに会えることは、大変珍しいことでした。当然、神楽師の皆さんも地元で見ることがないと驚かれたのですが、そうやって皆さんが見ている前で、ニホンカモシカもこちらをじっと見ているのです。それから、悠然と山に戻って行ったのですが、私は大変嬉しいショックを受けました。私は、これは山の神様が使いを寄越したのだと、本気で思いました。御挨拶している時に、ニホンカモシカが目の前に来るというのは、余りにもすごいタイミングなのです。これはつまり、私がここで仕事をさせていただくお許しを得たのだと思いました。これでやっと気持ちが晴れまして、そこでこの映画を撮らせていただいたわけでございます。少し変な神掛かったお話ですが、そのようなことを本当に感じさせてくれる場所で、神楽が奉納されているわけです。ですから、雄勝に行く度に、なんとなく浮き世を離れた、不思議な、神秘的な気持ちに今もなっております。

さて、もう見ていただいたとおり、お祭りというのは単純に季節のけじめの騒ぎではなく、神様と人間の結び付きのために行っております。また、地域の結び付きのためにあるのが、本来のお祭りの姿です。町の人たちがみんな手を結び合って一つになる、その一体感を体験するのです。それと同時に、神様という言葉を使いましたが、環境、自然に対しても、ここに住まわせていただき、ここで生きていける、ありがとうございますという感謝の気持ちを抱かせてくれるのがお祭りでございます。その中心になるものが神楽で、神楽がどれほど地域にとって大事なもののか、生活にとって大事なもののかが分かっていたかと思えます。

都会で生活しておりますと、お祭りは季節の付随的な単なるイベントと感じられますが、地方によっては、お祭りが中心となって1年のサイクルが成立しています。お祭りを復興することは、イコールそこに町が残っていることを意味しますので、大変大事なもののなのです。実際に、この映画にありますとおり、お祭りが復興したことで、ここにもう一度人々が集まり、ここはやはり自分たちの町なんだ、ここで頑張っていこうと思う人たちが結構いました。非常に前向きな気持ちになったともお聞きしております。それから2年経ちましたが、まだまだ町は復興しておりません。しかし、町の皆さんの気持ちの中で、お祭りができるのだから、自分たちも頑張っていこうという気持ちを抱いていると、お聞きしております。

今日は、心の復興というテーマではあるのですが、私がこの仕事を通して、被災地のお祭りの復興を見て感じたことは、まず私たちはこの作品を作ること、被災した皆さんに何かの励みになればと思っていたのですが、逆にこちらが励まされた結果になりました。日本人として、あるいは人間としての心の在り方は何かというのを、見つめ直す非常に大きな機会になったのです。

日本のようなある意味で非常に豊かに見える社会で暮らしていると、どうしても人間は利己的になりがちです。自分たちの損得勘定であったり、自分たちの利益、あるいは自分たちの身の保全であったりを第一に考えるようになっております。それも大事なことだとは思いますが、ただ、震災のような状況の中で、まず人々が思うことは、自分たちの身の保全だけではなく、周りは大丈夫なのか、というような周囲に対する思いというのが非常に強くなっていくわけです。そもそも人間は、社会的な生活を営む生き物でございますから、周囲と共に生きているということを、やはり第一に感じていなければいけないわけなのです。ところが、得てして私たちはどうしても、個人個人という見方をしてしまいます。私が雄勝で一番感じたことが、そのことでございまして、ここの人たちはお祭りを通して本当に地域一体となっていくことを考えている。一人一人ではなくてみんなが、ということをもっと考えている。そればかりか、このお祭りという要素の中には、自然、環境、古い日本人の言い方言えば、神様があるのです。それに対しての感謝という気持ちが結構強いのではないかと思います。

都会で暮らしていると、ここが一番薄れてしまうのです。自然、環境、つまりは神様。人間同士の結び付きというのは、当然ながら皆さん誰でもが感じるのだと思うのですが、人間だけではないのです。今回の仕事をやらせていただく時、最初にニホンカモシカと出会ったことは、本当に運命的なこととございまして、ここにいるのは人間だけではないよと教えられました。私は、神社を巡ると言いました。もちろん神社は人間が作ったものですが、そこには山があったり、自然があったりする。これらが人間を守って下さっているのだと取れるわけです。そういう自然や環境、そして神様を含む

全てのものに対して、まず感謝をする、ありがとうございますという気持ち、それからそれらのものを慈しむ、大事にするという気持ちが重要なのではないかと思います。「いやお祭りなんかどうでもいいんだよ」などと経済を優先するような言葉をスローガンにしている方もいらっしゃいますが、そういうお祭りをやって、みんなが一緒になって楽しむ場を用意するという、そういう気持ちも非常に大事だと思います。また、「ありがとうございます」を、一日一回でも神様や周りに対して言うということも大事なことはないかと思います。これこそが、私は人間にとってとても重要な心の要素なのではないかと思ひまして、その人間の本質的な気持ち、心、これを復興させる機会に、私たちは直面しているのだと思った次第でございます。ですから、単純に震災前に生活を戻すとか、その時の平穏な心に戻すのだということではなく、もっとそこから遡って、今、日本人として生きていくために、心の中に何を持っていくのが良いのか、を考える時期になっているのかなと思っております。

私はこの法印神楽という、たまさか一地域の神楽ではございますが、それを通して日本人の心というものを、もう一回考えさせられることになった次第でございます。非常にいい経験をさせていただいたと思っておりますが、実際、この雄勝という地域がその後どうなったかと申しますと、報道等でも御覧になっている方いるかと思いますが、現在では、がれきはほぼ片付いております。町の復興計画などは進んではいるようですが、随分時間が掛かると聞いております。

ただ、お祭りはその後も続いて行われております。お祭りになれば必ずこの神楽も奉納されております。全国の方々が、この神楽の復興を支援いたしまして、1枚また1枚と面が復興して行って、今やほとんどのお面、それから装束が、全て震災前と同じ状態に復元できたそうです。もちろん、御本人たちも、周りの人たちも大変苦労しながら神楽を存続させているわけですが、非常にこの神楽師たちが、自分たちの意義を感じております。つまり、ただ祭りで神楽をやればいいということではないと、神楽が町を引っ張って行ってると、町の人たちを集めるために自分たちはやっている、そしてその町の人たちを今後もそこに住まわせて、平穏に過ごさせるためには、自然や神様の力も必要なんだ、だから神様を忘れちゃいけないんだと、もう一度敬虔な気持ちになって、この神楽を奉納しようという心構えに変わりました。もちろん今までも真面目に神楽をやっていた方々なのですが、誰よりもそのことを強く感じられたようでございます。

この神楽はその後、大変注目されることになりまして、昨年（2013（平成25）年）は高円宮妃久子殿下が総裁を務めています、地域伝統芸能活用センターが主催しております、地域伝統芸能大賞を受賞いたしました。東京でも昨年にもう一度、国立劇場で上演されまして、その時は、皇太子御夫妻も御覧になられて、神楽師とお話を交わされるという場面もございました。非常にいい結果に結び付いております。ただこれは、一地域の神楽に過ぎません。まだまだこのように注目されていない地域の文化がたくさんございますし、このようにうまく復興できないでいるところが大半でございます。ですから皆様も、ここは神戸でございまして東北からは遠く離れておりますが、何か感じられることがございましたら、足をお運びになって被災地を御覧になられる、地域の方々とお話されると、そこでいろいろ思うこともあり、とても意味のあることになると思っております。

私も今、お祭り毎に、東京から雄勝に行っております。時間が余り無いのでゆっくりできませんから、自分で車を運転して行きます。片道500キロの距離なので、大体、神戸から東京までと同じくらいの距離です。6～7時間のドライブになりますが、日帰りでもお祭りに行くようにしています。日帰りで1000キロドライブすることになるので、もうへとへとになるのですが、それでも、遠いとは思いません。なぜならば、このような仕事を通して、地域の皆さんと親しく心の交流もさせていただいて、皆さんと強い絆ができた地域ですから、遠いと感じないのです。どんなに距離があっても、時間が掛かっても、必ずお祭りに行っております。ということで、結び付いていくというのも、また人間らしい面白い心の働きだなと思っております。

今日は短い時間ですが、少し映画の補足的なお話をさせていただきました。本来でしたらこの後、質疑応答の時間があればと思っていたのですが、今日は非常に長い時間、イベントに参加させていただいておりまして、お疲れだと思いますので、お話はこのぐらいにさせていただきたいと思っております。

それでは、今日は長時間本当にありがとうございました。この映画を制作していただきました、公益社団法人日本ユネスコ協会連盟様と日本テトラパック株式会社様には大変感謝をしておりますので、この場もお借りしまして、厚く御礼申し上げます。そして、今回、この映画の上映、そして私をお招きいただきました、法務省の皆様、公益財団法人人権教育啓発推進センターの皆様、そして兵庫県の皆様にも、本当に感謝しております。ありがとうございました。何よりも、今日、長時間参加していただきました皆様、本当にお疲れ様でございました。私から感謝の気持ちと、それから皆様の御多幸をお祈りしたいと思います。本当に今日はありがとうございました。

* このトークショーの様子は、動画共有サイトYouTubeの「人権チャンネル」にて視聴可能です。

<https://www.youtube.com/jinkenchannel>

●関連情報

* 有限会社ネオンテトラ

<http://www.neontetra.co.jp>

* 手塚真 ブログ「Tezka Macoto' 6D」

<http://tzk.cocolog-nifty.com>

* 日本ユネスコ協会連盟文化復興支援「雄勝～法印神楽の復興」90秒PR映像

<http://youtu.be/45QgceZ8IMQ>